

# 國學院大學學術情報リポジトリ

『万葉集』の歌語「梅柳」の生成：  
六朝・初唐の詩語の受け入れを通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 道代 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001576">https://doi.org/10.57529/00001576</a>

# 『万葉集』の歌語「梅柳」の生成

## —六朝・初唐の詩語の受け入れを通して—

Song Word of “Manyoshu” Generation of “Umeyanagi” :  
Through Accepting the Six Dynasties · the Shoto’s Poetry

鈴木 道代

キーワード：梅柳 梅花の宴 初唐詩 和歌と漢詩 春景

关键词：梅柳 梅花的宴 初唐詩 和歌与漢詩 春景

### 要旨

『万葉集』には、「梅柳（うめやなぎ）」を詠む歌が3首見られる。『万葉集』における梅と柳との取り合わせは、おおそ梅花の宴を始発として、春の美しさを表す典型的な景として定着してゆく。しかし、梅が咲く季節と柳が芽吹く季節とはずれがあり、実景とは言い難い。むしろ、梅と柳との取り合わせは中国詩文に頻繁に見られることから、天平期における大陸との交流の中で享受した春景の一つの典型だといえよう。

しかし、日本最古の漢詩集である『懷風藻』には梅と柳とを対句として用いる詩は見られるが、「梅柳（ばいりゅう）」の詩語は見られない。

一方中国詩では、早くに晋の陶淵明の詩に「梅柳夾門植。一條有佳花。」（「蜡日」『陶淵明全集』巻3）とあるが、この一首を除いては、初唐まで見ることができない。例えば初唐の詩文では、杜審言（一作韋應物）の「雲霞出海曙、梅柳渡江春。」（「和晉陵陸丞早春游望」『杜審言集』巻下）、王勃の「梅柳開而庭院晚。」（「春日孫學士宅宴序」『王子安集注』巻第6）などの他に、数例見ることができる。つまり中国詩文の「梅柳」は、主に唐代以降に使用された語であるといえる。

以上のことから、「梅柳（うめやなぎ）」の歌語は、天平期に興隆した梅と柳との取り合わせを詠む詩歌と時期を重ね合わせながらも、初唐の詩文に見える「梅柳（ばいりゅう）」を通して、やまと歌に転換した先進的な歌語であったと考えられる。

### 摘要

在《万叶集》中有关梅与柳的组合的记载，约始于梅花宴，自此梅柳就成为描写春天的典型的景物。但是梅花盛开的时节和柳树发芽的时节存在时间差，所以梅树开花柳树发芽并非实景。由于在中国诗词中经常可以见到描写梅柳组合的诗句，而天平时期日本和中国大陆交流频繁，才造就了日本当时这样的赏春美学观。

在日本最古老的汉诗集《怀风藻》中可以经常在诗文中见到梅和柳对仗的诗句。

中国诗文中，最早有陶渊明的诗句“梅柳夹门植，一条有佳花。”（《蜡日》）《陶渊明全集》卷3），除这首诗外在、直到初唐时期的诗文中才又出现。例如、初唐诗人杜审言一作韦应物的诗中“云霞出海曙，梅柳渡春江。”（《和晋陵陆丞早春游望》）《杜审言集》卷下），王勃的诗句“梅柳开而庭院晚。”（《春日孙学士宅宴序》）《王安子集注》第6）等几例之外，在其他诗文中也可见。因此可以说中国诗文中的梅柳，主要在唐代以后的文学作品中出现。

基于上述，梅柳作为歌语在天平时期成为新兴的事物，在诗文中开始被吟咏的时期和初唐时期相近，通过在初唐时期的诗文中出现的梅柳，可以确认梅柳这一歌语在和歌化过程中作为先进歌语引入之定位。

## 1. はじめに

万葉びとの草木や花に対する関心はきわめて高い。『萬葉集字典』の「万葉集動植物索引」によると、270種余りの項目が挙げられており、植物への興味は多岐にわたる。<sup>(1)</sup> その中には、蓮や橘あるいは椿など、記紀歌謡において、早い段階で取り入れられている植物がある一方で、梅や柳などは、漢詩の素材を先駆けとして、奈良朝に入ってから集中的に詠まれる傾向にある。

『万葉集』において梅と柳との取り合わせを詠んだ歌は、おおよそ梅花の宴(巻5・815～852)を始発として、春の美しさを表す典型的な景として定着してゆく。

しかし、本稿で問題とする「梅柳」という表現を含め、梅と柳との取り合わせについては、梅は早春に花を咲かせる花である一方で、柳が芽吹く季節は旧暦三月ごろであるため、梅の開花と柳の芽吹きとが揃うということは実景とは言い難い。むしろ、外来の植物である梅と柳とは、中国詩文に頻繁に見られることから、天平期における大陸との交流の中で享受した春景の一つの典型だといえるのではないだろうか。この「梅柳（うめやなぎ）」という歌語の生成は、おそらく「梅柳（ばいりゅう）」という漢語を取り入れた上で短歌の定型に合うように、訓読されたことが推測されるのである。

『万葉集』の中で「梅柳（うめやなぎ）」の歌は次のように詠まれる。

A 四年丁卯の春正月、諸の王・諸の臣子等に勅して、授刀寮に散禁せし

めし時に、作れる歌一首并せて短歌

真葛はふ 春日の山は うち靡く 春さりゆくと 山の上に 霞た靡き  
高円に 鶯鳴きぬ もののふの 八十伴の男は 雁が音の 来継ぐこの頃  
かく継ぎて 常にありせば 友並めて 遊ばむものを 馬並めて 行かま  
し里を 待ちかてに わがせし春を かけまくも あやに畏く 言はまく  
も ゆゆしくあらむと あらかじめ かねて知りせば 千鳥鳴く その佐  
保川に 石に生ふる 菅の根取りて しのふ草 祓へてましを 往く水に  
禊ぎてましを 大君の 御命恐み ももしきの 大宮人の 玉杵の 道に  
も出でず 恋ふるこの頃 (巻6・948)

反歌一首

梅柳過ぐらく惜しも佐保の内に遊ばむことを宮もとどろに (巻6・949)

〔梅柳 過良久惜 佐保乃内尔 遊事乎 宮動々尔〕

右は、神亀四年の正月に数の王子また諸の臣子等の春日野に集ひて、打毬の樂を作す。その日忽に天雲り雨ふり雷なり電す。この時に宮の中に侍従と侍衛と無し。勅して刑罰に行ひ、皆授刀寮に散禁して妄りに道路に出づることを得ずあらしむ。時に悞憤しく、即ちこの歌を作れり。作者いまだ詳らかならず。

B 追ひて大宰の時の梅花に和へたる新しき歌六首

み冬つぎ春は来れど梅の花君にしあらねば招く人もなし (巻17・3901)

梅の花み山と繁にありともやかくのみ君は見れど飽かにせむ (同・3902)

春雨に萌えし楊か梅の花友に後れぬ常の物かも (同・3903)

梅の花何時は折らじと厭はねど咲きの盛りは惜しきものなり (同・3904)

遊ぶ現の楽しき庭に梅柳折るかざしてば思ひ無みかも (同・3905)

〔遊内乃 多努之吉庭尔 梅柳 乎理加謝思底婆 意毛比奈美可毛〕

御苑生の百木の梅の散る花の天に飛びあがり雪と散りけむ (同・3906)

右は、十二年の十二月九日、大伴宿禰書持の作

C 二月二日に、守の館に会集ひ、宴して作れる歌一首

君が行もし久にあらば梅柳誰とともにかわが褻かむ (巻19・4238)

〔君之往 若久尔有婆 梅柳 誰与共可 吾褻可牟〕<sup>(2)</sup>

Aは、左注によると、神亀4（727）年の作である。内容は、多くの王子や廷臣たちが春日野で打毬の遊びをしていたところ、急に天候が悪化し雷が鳴り、稲妻が走った。しかし宮中には侍従も侍衛もいなかった。そこでこのときの外出者に罰を与えて全員外出を禁止したため、人々の心は晴れず、この歌を作ったという事情が示されている。このような事情において、作者未詳の長反歌が作られ、反歌において、梅柳の盛りが過ぎてしまうのは惜しいことよ、佐保で遊ぶはずであったのに、春日野に出かけたために宮中がとどろくような大事件になってしまったというのである。

Bは、天平2（730）年の正月13日に、大宰府で行われた大伴旅人主催の梅花の宴において歌われた32首に大伴書持（一説には家持）<sup>(3)</sup>が、後に追和したとされる歌6首の内の一首である。この歌では、今遊んでいる楽しい庭で梅や柳を折るかざしたら何の物思いもないことだという内容で、梅や柳を折るかざして遊んだ梅花の宴の歌に追和した歌である。

Cは、巻19の歌群の配列から天平勝宝3（751）年2月2日に越中において大伴家持の館で宴を催した際の歌である。この宴は左注によると、久米広縄が正税帳使として都へ赴くときの送別の宴であり、あなたの旅がもし長引いたならば、誰とともに梅柳と一緒に縋にして遊べばよいのかという内容で、官命の為に一緒に宴を共にすることができないことが惜しいという心情を歌ったものである。

A～Cの「梅柳」の歌は、Aは作者不明であるが神亀4年の作品であり、Bは大伴書持もしくは家持の作で、梅花の宴が開催された天平2年以降の作品である。Cは大伴家持の作で天平勝宝3年の作歌であり、「梅柳」の歌語は、神亀4年を皮切りとして、天平期とその周辺における歌語だといえよう。

また「梅柳（うめやなぎ）」の歌語は、基本的に梅と柳とを取り合わせた春の景物だと考えられるが、ここには中国詩語である「梅柳（ばいりゅう）」を通して成立した歌語である可能性が考えられることから、本稿では、中国詩語の「梅柳（ばいりゅう）」を検討することにより、歌語「梅柳（うめやなぎ）」の成立について考えてゆきたい。

## 2. 『万葉集』の梅と柳

『万葉集』の中で梅が直接的に歌の素材となるのは、天平期においてである。先述の通り天平期に大宰府で風流な梅花の宴が開かれ、この宴を皮切りとして梅の歌が多く現れる。その梅に柳を取り合わせることも春の風景を描くことにおいて好まれたのである。『万葉集』の中で梅と柳とを取り合わせた歌は次のようにみえる。

- ① 梅の花咲きたる園の青柳は纏にすべく成りにけらずや (巻5・817)
- ② 青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし (巻5・821)
- ③ 梅の花咲きたる園の青柳を纏にしつつ遊び暮さな (巻5・825)
- ④ うち靡く春の柳とわが宿の梅の花とを如何にか分かむ (巻5・826)
- ⑤ 春柳纏に折りし梅の花誰か浮べし酒坏の上に (巻5・840)
- ⑥ 梅の花取り持ちてみればわが屋前の柳の眉し思ほゆるかも  
(巻10・1853)
- ⑦ わが挿頭す柳の糸を吹き乱る風にか妹が梅の散るらむ (巻10・1856)
- ⑧ 梅の花しだり柳に折り交へ花にまつらば君に逢はむかも  
(巻10・1904)
- ⑨ 春雨に萌えし楊か梅の花友に後れぬ常の物かも (巻17・3903)

①～⑤は、先述した梅花の宴の際に歌われた歌である。⑥～⑧は、巻10の季節歌である。巻10は作者未詳歌であることから成立事情は知られないが、天平期かそれ以降の歌であるということが指摘されている<sup>(4)</sup>。⑨はCと同じ歌群の梅花の宴に追和した歌の内の一詩である。和歌における梅と柳との取り合わせは、基本的に天平期を中心として典型的な春の景として定着していったものと思われる。

①は梅の花が咲いている園に生いる青柳は纏にするのにはほどよくなっているのではないかという内容で、ここでは梅の花が咲いている上に、柳も芽吹いているといい、まさに柳を纏として宴を楽しむ良い時期を迎えているであろうという歌である。②では、青柳と梅の花とを折りかざして酒を飲んだあとは散って

しまってもよいというのであり、③は梅の花が咲いている園の青柳を藪にして今日一日遊び暮らそうという内容である。④は、打ち靡いている春の柳と我が家の梅の花とをどちらが美しいか優劣をつけられようかという内容の歌で、柳と梅とが春の景物としていずれがふさわしいかということ、梅花の宴の参加者に問うている。⑤は、「春柳」が藪を導く枕詞であるが、柳を藪にすると同じように、藪にするために手折った梅の花を誰が杯の上に浮かべたのだろうかという歌で、「春柳」を引き合いに出しながら、梅を藪にするだけではなく杯にも浮かべて風流を尽くしたことを歌っている。⑥は梅の花と手に取ってみると私の家の柳の眉が思われることだという内容である。恐らくこの歌は宴席での歌であり、ここで柳の眉と歌っているのは、柳のような眉、つまり中国風な女性の美しい眉を指すことから、家にいる愛しい子が思われるという意味を含んでいるものと思われる。⑦は挿頭とする柳の糸が風に乱れていて、この風にいとしいあの子の挿頭の梅も散っていることだろうかという内容である。⑧は梅の花をしだれ柳に折り交ぜて供物として奉ったならば君に遭うことができるだろうかという歌で、ここは愛しい男性に会うために梅と柳とを仏へ捧げるといのである。仏への捧げ物としてふさわしい供物として、春の美しい風物として梅と柳とが選択されたのだと考えられる。⑨は春雨によって芽吹いた柳かそれともいつもの梅の花を友とするために後れないように芽吹いた柳なのだろうかという内容である。

このように①～⑨に挙げた梅と柳との取り合わせは、①～⑤の梅花の宴はもちろん、おおよその歌が宴席のものである。また①②③⑤⑦が梅や柳を挿頭として風流を尽くす内容であり、④⑨が宴席の庭に植えられている梅と柳とが季節の美しい風物として歌われている。『万葉集』における梅と柳とを取り合わせた歌は、一つに宴の席で梅や柳を賞でて宴を楽しむことが基盤となっていること、二つに梅や柳を挿頭として風流を尽くすこと、三つにこれらの歌は梅花の宴を中心として天平期とそれ以降の歌に集中していると言えよう。

### 3. 『懐風藻』の梅と柳

このような梅と柳との景物の取り合わせは、日本の漢詩文学である『懐風藻』

にも見ることができる<sup>(5)</sup>。そこで次に『懐風藻』に見える梅と柳の取り合わせについて考えてゆきたい。

- ⑩ 五言。春日応詔。一首。 紀朝臣麻呂（詩番14）  
恵気四望浮。重光一園春。 恵気四望に浮び、重光一園の春。  
式宴依仁智。優遊催詩人。 式宴仁智に依り、優遊詩人を催す。  
崑山珠玉盛。瑤水花藻陳。 崑山の珠玉盛んにして、瑤水の花藻陳ぶ。  
階梅鬪素蝶。塘柳掃芳塵。 階梅素蝶鬪い、塘柳芳塵を掃く。  
天徳堯舜。皇恩霑万民。 天徳堯舜を十にし、皇恩万民を霑らす。
- ⑪ 五言。春日於左僕射長屋王宴。 塩屋連古麻呂（詩番106）  
卜居傍城闕。乘輿引朝冠。 居を卜い城闕を傍にし、輿に乗り朝冠を引く。  
繁絃弁山水。妙舞舒齊紈。 繁絃山水を弁じ、妙舞齊紈を舒く。  
柳条風未煖。梅花雪猶寒。 柳条の風未だ煖ならず、梅花の雪猶寒し。  
故情良得所。願言若金蘭。 故情は良に所を得る、願わくは言に金蘭の若きを。<sup>(6)</sup>

⑩は紀朝臣麻呂の詩である。題詞には、春日に催された宴で天皇の詔に応えたことが記されている。ここでは禁苑の春景として、7、8句目に「階梅素蝶鬪い、塘柳芳塵を掃く。」と、宮廷の階段の梅はその白さを蝶と競い合い、池の堤の柳は良い香りの塵を掃いているという春景を描いている。この応詔詩の主旨は、「天徳堯舜を十にし、皇恩万民を霑らす」とあるように、天子の徳を讃美することにある。紀麻呂は、禁苑の素晴らしさを述べることにより、天子の治世を寿ぐのである。その禁苑の景として「階梅」と「塘柳」という、梅と柳との取り合わせが選択されているのである。次の⑪は塩屋連古麻呂が、春日に長屋王の邸宅の宴において詠んだ詩である。ここでは、「柳条の風未だ煖ならず、梅花の雪猶寒し」と詠まれ、柳に吹く風はまだ暖かではなく、梅花に降る雪もまだ冷たいという内容である。梅の花は雪が残る寒い時期に花を咲かせることから、「節操、潔白」の象徴として「歳寒三友」の一つに数えられ、文



人の理想的な生き方を表している。おそらくこの知識を踏まえた上で、文人同士の「故情」、つまり積年の友情を契ることに趣旨があり、「金蘭」のごとき固い友情を結ぼうと詠むのである。

このように『懷風藻』の詩において梅と柳とのとり合わせは、応詔、そして長屋王邸宅という宴の場において、一方ではすばらしい禁苑の春景を梅と柳とで表現し、一方では友情を契る宴において友と一緒に賞でべき春景として描かれているのである。

#### 4. 中国詩の「梅と柳」

こうした梅と柳とを取り合わせる表現方法の基盤は中国詩にあると思われる。次に中国詩に見える梅と柳の取り合わせについて見て行きたい。梅と柳とを詠み込む歌は中国詩においては、多数見ることができ、例えば次のような詩がある。

⑫ 和劉上黃春日詩 湘東王繹 (『玉台新詠』卷7)

新鶯隱葉囀。新燕向窗飛。 新鶯葉に隠れて囀り、新燕窓に向ひて飛ぶ。  
柳絮時依酒。梅花乍入衣。 柳絮時に酒に依り、梅花乍ち衣に入る。  
玉珂逐風度。金鞍映日暉。 玉珂風に逐ひて度り、金鞍日に映じて暉く。  
無令春色晚。獨望行人歸。 春色をして晩れ、獨り行人の歸るを望ましむる無かれ。

⑬ 初春詩 沈約 (『玉台新詠』卷5)

道暈陽春。相將共携手。 道を夾んで陽春を覓め、佳人共に手を携ふ。  
草色猶自腓。林中都未有。 草色猶ほ自ら腓む、林中都て未だ有らず。  
無事逐梅花。空教信楊柳。 梅花を逐ふを事とする無く、空しく楊柳に信せしむ。  
且復歸去來。含情寄杯酒。 且つ復た歸り去らん、情を含みて杯酒を寄す。<sup>(7)</sup>

⑫は上黄に赴任した劉の春日詩に唱和した詩であるということが題詞に記さ

れている。この詩では、湘東王繹が官人たちと春日に遊覧にでかけた時に、劉氏に対して独り残してきた妻の心を思いやりなさいという内容の詩である。ここでは遊覧に出かけた先の春景として、初句から4句目で「新鶯葉に隠れて囀り、新燕窓に向ひて飛ぶ。柳絮時に酒に依り、梅花乍ち衣に入る。」と詠まれている。鶯の鳴き声と燕の飛行が対となっており、さらに柳絮が飛んできて、酒に浮かび、梅の花が衣の袖に張ってくるというのであり、ここも対句の形をとる。ここでは酒宴の様子が詠まれ、遊覧した先で仲間たちと春日の風景を賞でながら宴を催している場だと考えられる。この春日の美しい遊覧の景を、鶯、燕、柳、梅によって表現しているのである。⑬は沈約の初春の詩である。この詩は、初春に、遠く離れている夫のことを思う妻の心情を景に託して詠んだものであり、春のうららかな景として、「梅花」と「楊柳」とが詠まれている。しかし夫が不在であることによって、「梅花を逐ふを事とする無く、空しく楊柳に信せしむ。」というように、春の美しい季節を空しく過ごしてしまうのだというのである。ここには、本来夫がいたのならこの春景を二人で楽しむことができるであろうという心情が込められていると考えられるが、妻である私は一人なので、「且つ復た歸り去らん」と、春景を楽しむこともなく、独りで家路につくという内容である。

ここで描かれている梅と柳との取り合わせの景は、遊覧した際の美しい景として詠まれる。⑫は、仲間達と宴を催した時の春の景であり、⑬は、本来なら男女で一緒にめでるべき美しい風景として描かれている。六朝期に作られた梅と柳とを詠み込む詩は、「梅柳」という熟語としてではなく、それぞれの風物を織り混ぜながら、遊覧や行楽という場の賞美すべき景として描かれていることが確認される。

## 5. 中国詩の「梅柳」

六朝期には梅と柳とが「梅柳」という詩語ではなく、対句的な方法を用いて春景として詠み込まれてゆく状況を確認することができる。そこで次に中国詩において梅と柳を合わせた熟語、つまり「梅柳」という詩語の成立について検討してゆきたい。

「梅柳」の詩語は中国詩において、次のようにみることができる。

⑭ 蜡日 陶淵明 (『陶淵明全集』巻3)

風雪送餘運。無妨時已和。 風雪餘運を送るも、時の已に和するを妨ぐる事無し。

梅柳夾門植。一條有佳花。 梅柳門を夾みて植え、一條佳花有り。  
我唱爾言得。酒中適何多。 我れ唱えば爾が言得たり、酒中適するもの何ぞ多き。

未能明多少。章山有奇歌。 未だ多少を明らかにすること能わざるも、章山に奇歌有り。<sup>(8)</sup>

⑮ 和晉陵陸丞早春遊望 杜審言(一作韋應物詩) (『杜審言集』巻下)

獨有宦遊人。偏驚物候新。 獨り宦遊の人有り、偏へに物候の新たなるに驚く。

雲霞出海曙。梅柳渡江春。 雲霞海に出でて曙け、梅柳江を渡つて春なり。

淑氣催黃鳥。晴光轉綠蘋。 淑氣黃鳥を催し、晴光綠蘋に轉ず。  
忽聞古調。歸思欲霑巾。 忽ち古調を歌ふを聞き、歸思巾を霑さんと欲す。<sup>(9)</sup>

⑯ 春日孫學士宅宴序 王勃 (『王勃集注』巻6)

若夫懷放曠寥廓之心。非江山不能宣其氣。負鬱悒不平之思。非琴酒不能洩其情。則林泉為進退之場。樽罍是言談之地。白衣送酒。青陽在節。鳧雁亂而江湖春。梅柳開而庭院晚。楚屈平之瞻望。放於何之。王仲宣之登臨。魂兮往矣。俠客時有。

若し夫れ放曠寥廓の心を懷ふ。江山あらずは其氣を宣ぶこと能はず。鬱悒不平の思ひを負ふ。琴酒にあらずは其の情を洩らすこと能はず。則ち林泉進退の場と為す。樽罍是れ言談の地。白衣にして酒を送る。青陽に節在り。鳧雁亂れて江湖春なり。梅柳開きて庭院晩なり。楚屈平之れ瞻望し、放ちて何くにか之かん。王仲宣之れ登臨して、魂往かん。俠客時に有

且傾鸚鵡之杯。文人代興。　　り、且た鸚鵡の杯を傾く。文人興に代わり、  
聊舉麒麟之筆。人采一字。　　り、聊か麒麟の筆を擧げる。人采一字。  
四韻成篇。　　　　　　　　　　四韻成篇。<sup>(10)</sup>

中国詩において最も早い段階で「梅柳」の詩語が現れるのが、東晋末から南朝宋（4世紀末から5世紀）にかけて活躍した陶淵明の詩である。この詩では、「梅柳門を夾みて植え、一條佳花有り。」と見え、この「梅柳」の景は、「風雪餘運を送るも、時の已に和するを妨ぐる事無し。」というように、風雪が今なおその名残を残しているが、時はすでに春の気配が調うのを妨げてはいないと、春の訪れを知る景として描かれている。題詞の「蜡日」とは、12月に田畑や山林の神々を祀る祭のことで、そこで友人と酒を飲んで、歌うことが詠まれている。

しかし、この陶淵明以降、「梅柳」の詩語は六朝期に見ることはできない。おそらくこの陶淵明が用いた「梅柳」という詩語は、一回性のものであり、後世に継承されなかったものと考えられる。その一方で、「梅柳」という詩語としてではなく、それぞれ「梅」と「柳」という春景の素材を詩の中で合わせてゆく。つまり梅と柳とを対句として取り込んだ詩というのが、先に挙げたように六朝頃から典型的な漢詩的な春の景として定着していったものと推測される。

このような流れの中で、六朝期を経て、初唐の詩文に「梅柳」の詩語が再び登場する。一つは、⑮の「和晉陵陸丞早春遊望」と題された詩である。この詩は、杜審言が南方の晉陵という地に滞在していた時に、陸丞という人物が「早春遊望」という題の詩を示し、それに唱和したという事情が示されている。この詩では、独りで故郷を離れている役人が、地方の赴任先で季節の移り変わりに心を驚かされたという内容である。冬から春へと季節が移ろってゆく中で、その訪れた赴任地の春の風景として、「雲霞海に出でて曙け、梅柳江を渡つて春なり。」という景が描かれている。内容は、雲や霞が海上にわき出て、そして朝日が昇り、梅柳が江南地方から北上し、春になったという。ここでは「雲霞」と「梅柳」とが対句となっており、江南から除々に北上してきた景として「梅柳」が描かれている。そして、このような春景を見るにつけ暖かな春を迎

える季節がやってきたというのに、自分自身は未だ故郷に戻ることができないという望郷の念を歌っているのである。

また、次の⑯は王勃の「春日孫學士宅宴序」である。この序文では、宴がとり行われた理由として、「若し夫れ放曠寥廓の心を懷ふ。江山あらずは其の氣を宣ふこと能はず。」とあり、また「琴酒にあらずは其の情を洩らすこと能はず。」と記している。「放曠」とは、心の思うままに振る舞うこと、「寥廓」は広々としていることで、心を広く持ち思うままに振る舞いたいと願う、自己の心持ちを述べている。そして山水の自然がなければその気を伸ばすことはできなく、また「琴酒」、つまり琴や酒がなければその心を晴らすことができないのだという。そのために仲間同士で酒を飲み美しい春の季節を賞でるのだというのである。友との交流には「琴酒」と共に美しい風景が必須であるが<sup>(11)</sup>、その時の春景として、「鳧雁亂れて江湖春なり。梅柳開きて庭院晩なり。」と描かれている。水鳥や雁が飛び交い水辺には春が訪れ、そして梅が花咲き、柳が芽吹いている庭に日が暮れてゆくことを述べている。ここでは、「鳧雁」と「梅柳」とが対句となっている。ここには仲間同士が集まり、酒を飲み、琴を弾き、詩を読んで楽しむという宴の場で、賞美すべき春景として「梅柳」が描かれているのである。

このように中国詩における「梅柳」の詩語が成立した時期は、その先駆的な存在として陶淵明の詩が挙げられる。しかし、本格的に詩語として定着するのは初唐を待たなくてはならなかったのである。

このように、日本の歌と中国の詩とに見える梅と柳の取り合わせ、そして中国詩の「梅柳（ばいりゅう）」と和歌の「梅柳（うめやなぎ）」の成立の関係を考え合わせると、まず中国文学においては、梅と柳との取り合わせの景が六朝期に興隆し、それが初唐にいたって対句が整ってゆく中で「梅柳」という詩語が生成されたと考えられる。そして「梅柳」が描かれる場合は、一つに遊覧や宴席における仲間同士の関係において賞美すべき春景として、二つに家族や愛する人と別離の状態にあるとき春の悲しみを導く春景として描かれていくことが確認される。一方、『懷風藻』において梅と柳の取り合わせは、『懷風藻』の詩が「応詔詩」や宴席詩が大半を占めることにもよるが、宴席で賞美すべき春の美景として取り入れられてゆくという傾向にあるといえる。そして和歌の

文芸において梅と柳の景物の組み合わせは、天平2年に大宰府の旅人邸で開催された梅花の宴を始発として天平期とそれ以降に春景の素材として定着してゆき、基本的に心を同じくする仲間との関係において、梅や柳を藪にして風流な宴を楽しむという主旨として取り込まれていくのである。さらに和歌においては、「梅と柳」という取り合わせの景だけではなく、初唐詩に生成した「梅柳（ばいりゅう）」の詩語を、いち早く歌語として取り入れてゆくのである。それは、中国詩のように「梅と柳」との取り合わせから「梅柳」へと成熟するという段階的なものではなく、「梅と柳」という取り合わせと同時、むしろ梅に柳の取り合わせよりも、先行して「梅柳（ばいりゅう）」から「梅柳（うめやなぎ）」という漢語をとりこんで和歌として翻訳していく状況を見ることができる。日本においては、『懷風藻』の漢詩よりも、一歩先へゆく季節の風物への関心が「梅柳（うめやなぎ）」という歌語を生成することになったのではないかと考えられるのである。

## 6. おわりに

中国文学においては梅と柳の取り合わせが、六朝期に興隆し、その後初唐にいたって「梅柳（ばいりゅう）」という詩語が生成されていった。中国詩の「梅と柳」「梅柳」は、遊覧や宴席における仲間同士の関係において賞美すべき景として描かれてゆく一方、家族や愛しい人との別離の状態において悲しみを導く景としても描かれてゆくという、二つの方向性を持っている。

日本の漢詩においては応詔詩や交友詩など宴席で賞美すべき春景として梅と柳の組み合わせが取り入れられてゆく。一方、和歌は心を同じくする仲間との関係において、梅や柳を挿頭として風流な宴を楽しむという内容で詠まれ、また、梅と柳の取り合わせと「梅柳」とを同時に受け入れてゆくという特徴が見られる。

以上のことから、日本の「梅柳（うめやなぎ）」の歌語は、天平期に興隆した梅と柳との取り合わせを詠む詩歌と時期を重ね合わせながらも、初唐の詩文に見える「梅柳（ばいりゅう）」を通して、やまと歌に転換した先進的な歌語であったと考えられるのである。

注

- (1) 久松潜一監修、萬葉集講座別巻『萬葉集事典』（有精堂出版、1975年）。
- (2) 『萬葉集』の万葉仮名の表記、および書き下しは中西進『萬葉集 全訳注原文付』（講談社）による。以下同じ。
- (3) 諸本「家持」とするが、元暦校本のみは「書持」とする。
- (4) 阿蘇瑞枝氏は、巻10の歌について巻8との関係から、万葉第三期以降であると指摘している。（「万葉集の四季分類—季節歌の誕生から巻八の形成まで」『論集上代文学』第四冊、万葉七曜会、1973年）。
- (5) 『懷風藻』における梅と柳との取り合わせは、本文例⑩⑪の他に、  
柳絮未飛蝶先舞。梅芳猶遲花早臨。（「七言。望雪。一首。」詩番22）  
玄圃梅已故。紫庭桃欲新。柳絲入歌曲。蘭香染舞巾。（長屋王「五言。元日宴。應詔。一首。」詩番67）  
芳梅含雪散。嫩柳帶風斜。（百濟公和麻呂「五言。初春於左僕射長王宅燕。一首。」詩番75）  
柳條未吐綠。梅葉已芳裾。（箭集宿禰蟲麻呂「五言。於左僕射長王宅宴。一首。」詩番82）  
庭梅已含笑。門柳未成眉。（大津連首「五言。春日於左僕射長王宅宴。一首。」詩番84）  
などがある。
- (6) 『懷風藻』の漢字本文および書き下しは辰巳正明『懷風藻全注釈』（笠間書院、2012年）による。
- (7) 『玉台新詠』の引用は、『玉台新詠』（明治書院）による。
- (8) 陶淵明の詩の引用は、松枝茂夫・和田武司訳注『陶淵明全集』（岩波書店、1990年）による。
- (9) 『杜審言集』の引用は、王雲五主編『張蠙詩集 杜審言詩集 陳伯玉集 崔塗詩集 弘山集』（臺灣商務印書館、1973年）による。
- (10) 『王子安集注』の引用は、王勃著、蔣清翊註『王子安集注』（上海古籍出版社、1995年）による。
- (11) 辰巳正明氏は交友における「琴繪」と「美景」の重要性について、「琴繪の遊びを尽くすことが友愛を構成する重要な条件であり、その友愛は良辰・美景を共に心を同じくして賞美することでありその完成は文章（詩文）に至ることであった」と指摘している。（「交友論（1）—交友をめぐる文章論の理念性とその展開」『万葉集と比較詩学』おうふう、1997年）。